

# 〈語り〉を読み解く

## —質的分析の質を高めるために—

能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

近年、質的研究が心理学の諸分野で盛んになり、特にインタビューを通して得られた語りのデータを分析した研究論文の投稿が、伝統的な心理学関係の学術誌においても増加しつつある。筆者は複数の学術誌においてここ数年、編集や査読にあたってきたが、その質についてはまだまだ伸びしろがあるように感じられる投稿論文が少なくない。

研究の質を高めるための必要条件として忘れてはならないのは、質の高いデータを用いるということであろう。この点は量的研究だろうが質的研究だろうが違いはない。質の低いデータを用いた場合には、その後の分析がいかに精緻なものであっても、最終的な成果もまたその質に問題が出てくることになる。

質的インタビュー研究のプロセスについて詳細に展開した Kvale & Brinkmann (2008) は、よりよい研究成果を出すための条件としてインタビューそれ自体の質を高めることを挙げ、いくつかの要件をリストアップしている。そこには、研究者がインタビュー中にインタビューイの語る内容を、追加質問を通じて確かめ、深めていく作業が含まれているが、いわばそれは、研究者が語られたことの意味をその場で読み取ろうとする姿勢と切り離すことはできない。研究者の読みの姿勢は、質的研究開始時点から問題になることがわかる。

ただ、そこでもし質の高いインタビューが行われたとしても、結果として得られた多くの場合トランスクリプトの形をとるデータが、ただちに質の高さを示すとは限らない。というのも、トランスクリプトはそれ自体では単なる文字の並びに過ぎず、それを生かすも殺すも、それを読む研究者の目やスキルにかかっているからである。

質的データは、最初からそこに一義的・直接的な意味が示されているわけではないという点に特徴がある（能智，2011）。そこでの意味は隠喩的であり、個々の部分はより大きな文脈を読むことによって明確になる

だろう。逆に、個々の部分の意味に注目することで、全体の意味が変化することもある。質的データの部分と全体は常に相互参照しており、その関係を生かしつつ読みを深めていく必要がある。

近年では質的研究と一言で言っても、データに向かう際のアプローチは1つに限定されず、データを読む際の姿勢も単一ではない。大きく分ければ、質的データの背後に仮定される意味を読み取ろうとする分析アプローチと、テキストの言語的な面において何が生じていくのかを明らかにしようとする分析アプローチがある。前者は、グラウンデッド・セオリーや KJ 法などに代表され、我が国の質的研究においては比較的よく用いられるアプローチと言える。後者には、会話分析、ナラティブ分析、ディスコース分析等が含まれ、様々なつながりを意識しながらテキストの解釈を行う点が特徴的である。

今回の講習会においては、インタビューで得られた〈語り〉を読むという研究のフェイズに焦点を絞り、読みへの感受性を高めていくための経験の場を提供する。特に、言語に注目したアプローチに関わる質的データの読みは、普段の私たちが文章を読むときには実践されることが比較的少ない。データのどの点に注目すれば、言語に注目した分析に資する面を読み解いていけるだろうか。たとえ最終的に、意味に注目するアプローチで分析を進めていくにしても、言語的な側面に関わる読みは、意味の読み取りをいっそう的確なものにし、分析の質を高めていくための基礎を準備するだろう。

### 引用文献

Kvale, S. & Brinkmann, S. (2008). *InterViews: Learning the craft of qualitative research interviewing*. Thousand Oaks, CA: Sage.

能智正博 (2011). 質的研究法. 東京大学出版会.